

であつたのはいつの頃だつたか、もうそんなことすら思い出せなくなつてゐる。

あれだけ啜つた血の味でさえ、記憶と共に色褪せ消えていった。

あんなにも狂おしく愛した、君の面影を僕はもう辿ることが出来ない。

夜の帳は今朝方から降り続く霧雨によつて白く濁り、冷めた靄が、静まり返つた街を不気味に揺らめかせながら包んでいた。

しかし、アスファルトに叩きつけられる雨音は、鼓膜によく馴染む懐かしい響きを孕んでどこか心地よく、混沌する世界に自分が少しずつ沈んでいく感覚にふと襲われる。

雨に打たれ始めてから、どれくらい経つただろうか。

とうに膝の力は抜け、支えを失つた身体は路地へと崩れ落ち、これだけ全身を濡られたにも関わらず唇は血が滲むほどに乾ききついていた。

だ。

雨雲の隙間から一筋でも金色に輝く陽の光が差し込めば最後この哀れな肉体は灰となり、静かな街に吹きすぎぶ風に乗せられ散り散りに消えていくだろう。

人間の血を食らい生きる種族の力が、最も弱まる聖木曜日を狙つた招かれざる訪問者たちに眠りを解かれ、鉛で下腹を撃ち抜かれたのは一刻前のこと。

鼻を刺す灯油の匂いが部屋中にたちこめた次の瞬間、辺り一帯

飢えを凌ぐと口端から少しづつ溢れだすその赤い零を舌で掬い取り、喉を鳴らして飲み込んではみたものの、やはり自らが流したそれでは何一つとして満たされることはなく、むしろ空腹を煽る惨めな思いに囚われるだけである。

いつそのこと、青白いこの皮膚に食らいつけばせめて気休めにはなるのかと何度も苦悶したが、寒さに震えるこの腕に牙を沈めたところで、それはただの独りよがりであることには変わりがない。

そして、街に朝が訪れると同時に終焉を迎えることとなるのだ。

は火の海となり、闇夜を不吉な赤色に染め上げた。

霧雨の中でも轟々と燃え盛る館住まいとしていた廃屋から逃れたものの、襲撃を企んだ愚かな人間たちに天誅を下す力は生憎と残されておらず、人目のつきにくい路地裏に身を潜めることが精一杯だった。

望まぬ目覚めを強いられた上、急所には銀の銃弾、加えて聖木曜日の呪縛に苛まれた身体はみるみる生氣を失い、命の灯火は今にも消え去つてしまいそうなほどに細々と揺れ、迫り来る死の影を瞼の裏へと映し出している。

自分は、死んでしまうのだろうか。

ここ数百年の間で吸血鬼にとつて随分と生きにくい世の中に変わつてしまつたと実感するがある。

人間たちの間で次々と強力な武器が普及していくにつれ、吸血鬼や魔女狩りはその勢いを増し、気がつけばこの街で同胞を見かけることはなくなつていた。

闇にまぎれて生きる限り、そして生き血を啜り続ける限りは

不老不死と謳われた吸血鬼の時代は知らぬ間に終わりを告げ、かつては夜空を覆い尽くさんばかりに生息していた蝙蝠ですら吸血鬼の生み出した不吉な下僕であると黒ごと焼き払われ、その姿をすつかり消してしまつた。

立ち並ぶのは、世相を反射しながら眩しく光るガラス張りの高層ビル。そして、夜を恐れぬ人間たちの徘徊と、目を背けたくなるほど鮮やかに街を照らし続けるネオンの輝き。

夜が短くなつた街で生き存えるのは、言うまでもなく困難を極めた。

この街に残されたのは、死の淵を彷徨う身体ひとつ。

それさえも失いつつある今、もはやこの世界に吸血鬼の居場所など存在しないのではないかと自己嫌悪に陥らずにはいられない。

すべてのものは朽ち果てていく運命にあるというのに、なぜ、人間だけは数百年経つた今も生き延びていられるのか。

「ツ、は……」

街を包む霧が、一層濃くなつた。

いや、己の視界に霞がかかりだしたのか、目に見える全てが白

く掠れだし、雨音や路地裏の死角をとめどなく行きかう喧騒は、耳元からどんどんと遠ざかっていく。

いよいよ、この身体が灰になる瞬間が来たのかと視力を失いつつある瞳を伏せた、その時だった。

「あなたは、このまま死んでしまうの？」

耳鳴りさえ遠ざかりつつあつた鼓膜に届いた、雨音の心地よさ

と同調する物静かで柔らかな女の声。

もう一度と聞くことはないだろうと覚悟していた瞳をそつと開けてみれば、霞の向こう側には一人の女が傘もささずに立ち尽くしていた。

掠れがかった視界では、はつきりと確認することが出来なかつたものの、雨に打られ、下腹から血を流した吸血鬼を恐れている様子は窺えない。

ただ、憐れみも嘲りも見当たらないガラス細工のような平坦な瞳でこちらを見下ろしているだけだ。

魔力を半ば失い、人間の姿を保つことが出来ず、飢えた牙を

むき出しにしたまま虫の息を繰り返すこんな姿を晒した男の正体が吸血鬼だと気づけぬはずがないというのに、目の前の女からは恐れを感じることが出来なかつた。

時代の流れに逆らうことが出来なかつた哀れな吸血鬼の最期を

看取りに来た天の使いか、はたまた地獄へと誘う死神だろうか。

「どうすれば、あなたを助けられる？」

しかし、雨音に乗つて彼女の唇から吐き出されたのは、天使も死神も決して口にはしないだろう、延命の方法を求めるものだつた。

そして彼女は、こちらが答えるより先にその場に膝をついて長い髪をかき上げると、露わになつた白い首筋をこちらへと差し出し、そつと目を開じる。

傷ひとつない滑らかなその白肌は、滅びかけた吸血鬼の目には眩しく、思わず喉を鳴らさずにはいられない。

女がどういったつもりで息も絶え絶えの吸血鬼に対し、自らその首筋を差し出すのかは分からなかつたが、理由を深読みする

余裕など残されているはずもなかつた。

「まだあなたに生き延びたいという心が残つてゐるなら、私の血

を吸つて

女が言い終わるや否や、渾身の力を振り絞り、誘われるがま

まその首筋に唇を寄せ、飢えの為か歓喜の為か、小さく震える

牙をその白肌へと少しづつ埋めていく。

それでも女は表情を歪めることなく、そして悲鳴ひとつあ

げることもない。

ただ、失いかけた命を繕うようと、目の前の血を啜り上げる

吸血鬼の乱れた呼吸だけが、行き場もなく宙を舞つた。

「可哀想な人」

「……は、ツ……ハ……」

たんにぎせい いがい いぬ ほうほう ほうほう
たんにぎせい いがい いぬ ほうほう ほうほう

たんにぎせい いがい いぬ ほうほう ほうほう

闇夜が蠢く路地裏の中でも映える純白と真紅のコントラスト

は、何物にも形容しがたい美しさを放ち、朽ち果てかけたこの

身体を潤し、満たす。

その瞬間、失いつつあつた五感が全て舞い戻つたような気がした。

あれからどれだけの月日が経つただろうか。

突然の天変地異に見舞われた世界は瞬く間に崩壊の道を辿り、

人間が作り上げた軌跡は何一つとして残らなかつた。

地上を覆いつくしていた忌々しい高層ビルはひとつ残らず崩れ

落ち、かつては絶滅の危機に曝されていた同胞も今では夜を迎え

るたびに地上へと降り立ち、生き残つた僅かな人間たちを糧とし

て逞しく生き延びている。

理想の世界だった。

君がいなくなつてしまつたといふ、ただひとつのことを探して。

「どこへ行つたんだ、こんな場所へ俺だけを置き去りにして」

のろのろ呪われたこの身体で生き易い時代が訪れようど、君がいなけれ

ば僕の世界は何の意味も持たないといふのに。

「傷の具合はどう」

暗闇にすっかり溶けた女は表情と同じく、抑揚のない口調でそう問いかける。

「あれだけの瀕死に陥った場合、吸血でどのくらい回復出来るのかは分からぬけれど、でも自分の足でここまで歩いて来られたところを見る限り、心配はないみたいね」

「……人間くせに、どうしてそんなことを知つている」
アナログを失いつつあるこの時代で、吸血鬼の実態を知る者は少ない。

「彼女に案内された廃屋は、繁華街のはずれにひつそりと佇む病院跡であった。
虫に食い荒らされ穴だらけのシーツの上、砂と埃をかぶつた医療器具が転がっている。

人の手によつて相当荒らされていたが、割れた薬瓶の破片が散らばる床に真新しい足跡や人為的な破壊の痕跡が見当たらぬところから察するに、ここ数年は少なくとも人の出入りはないのだ

ろう。

夜明けとともにすっかり雨はあがつてしまつたのか、崩れかけた壁の隙間から眩い朝の気配が漏れ始めた為、陽光から逃げるようにして廃屋の奥へと進む。

ハンターの類かと、生氣を取り戻しつつある掌を握りしめ、いつでもその華奢な肉体を切り裂けるようにと身構えたが、女は暗闇の中で小さく首を横に振り、問いかけを否定してみせると、初めてその表情に小さな笑みを浮かべた。

行き着いた場所は手術室だろうか。頑丈なコンクリートの壁は待合室や处置室と違つて未だ崩れ落ちることなく、一筋の光とだけどね」「かわいそうな吸血鬼を一人、知つてゐるの。もうずっと昔のこも届かぬ完全な暗闇がそこには存在していた。

哀愁ばかりの漂う、決して誰にも救われない微笑だった。

それからというもの、彼女は毎夜のこと吸血鬼が身を潜める廃

病院に足を運んではその白い首筋を差し出し、吸血を自ら

懇願した。

いつしか、しなやかだった彼女の体は不健康に痩せ細り、

透明感溢れる白肌には青みが差し、血液を失うことで一步ずつ

死へと歩み寄つていく様が窺えたが、これは吸血鬼に魅入られた

女の宿命である。

吸血の際に首筋から全身へと広がる麻薬のような痺のある

快感を自らの意思で断ち切ることは難しく、命が奪われるその

瞬間まで心身ともに吸血鬼へと捧げ、最期には真紅の灰となり消

えていくのだ。

以前、吸血鬼に出会ったことがあると語っていたが、その時には

魅入られなかつたのだろうか。

それでも、彼女が朽ち果てるより先に吸血鬼がハンターの手にかかり一命を取りとめたのか。

幾度となく尋ねてみたものの、彼女は口を閉ざし、ただ哀しげな微笑を浮かべ、首を緩く横に振るだけだった。

しかし、出会ったあの日と同じ霧雨の降る夜のこと。

吸血鬼の胸にしなだれかかり、今にも消え入りそうな頼りなくか細い呼吸を繰り返す彼女が、ふと口を開いたのだ。

「彼女と初めて出逢つたのは、夢の中だった。私がベッドで眠っていると、部屋に忍び込んでは私のことを抱きしめて優しく囁く。あなたと私は光と影。例えどちらかが死の淵に墮ちたとしても、互いの心は決して分かつことがないと」

あれほど頑なに語ろうとはしなかつた、過去に出会つたという吸血鬼の話を、静謐さを纏つ彼女がこれほど饒舌に語る様子は珍しかつた。

「こことなくその口調に陶酔のよくな趣が感じられ、どうやら回想に浸りながら、その身体ごと胸に秘めた思い出の中へ溺れていることが窺える。

非常に彼女らしくない、非現実的な御伽噺だった。

「あなたには分かる？」
惹かれ合うもどかしさが

「お前がどれほどその女吸血鬼に入れ込んでいたのかは知らない
いが、生憎擬似恋愛は吸血鬼の常套手段だ」

「そんなこと、分かつて。でも、彼女だけは違つたの」

「何が違うというんだ。吸血の快樂に魅入られたお前は、こうして
その女吸血鬼の代わりに俺を見つけ出したのだろう」

「彼女と出会つて、どれほどの時が経つたであろうか。

ここへ来て彼女は初めて哀愁以外の表情を、その美しくも
無機質な顔に強く浮かべてみせたのだ。

眉間に寄せられた深い皺と、鈍く光る鋭い視線。わなわなと小さく震える唇から発せられたのは——憎悪交じりの憤怒である。
「ちがう、ちがう……！」

どれだけ彼女が声を荒げたところで、血の氣をすつかり失つた
蒼白の頬に赤みがさることはなかつた。

しかし、人間味が欠落していると思われた彼女が、ここまで

感情を露に曝け出し、激昂する姿を目の当たりにした吸血鬼は眉を顰め、否定の言葉を繰り返しながら激しく首を横に振り続けて取り乱す彼女の背中を搔き抱くと、再びその首筋に唇を落とし牙を突き立て、その血を全て吸い尽くすことで宥めようとしたのだが、小さな身体を震わせながら、興奮と絶望に暁つた瞳でこちらを見上げるその表情があまりにも痛々しく、思わず吸血の手を止めてしまう。

「吸血鬼に取り憑かれた人間の結末は、あなたが言った通り、紛い物の愛情に振り回されて死んでいく……。ただそれだけよ。でも、あの子は私に生きろと言つた。そうして吸血を止めたあの子は、私の代わりに死んだ。雨の日、あなたが路地裏で苦しんでいたように彼女も飢えて我をなくして、それでも私の血を吸おうとはしないで……！」朝日が昇ると同時に真っ白な灰になつて風に散らされ、消えてしまつた。あんなにも愛していたのに、私は彼女の亡骸さえ、ひと掴みも手にすることが出来なかつた

にすればするほどに醜く歪み、目元には穢れのない純白の肌に似合いの隈が目立つようになつてゐた。

これほどまでに彼女が己という形を失うまで、その女吸血鬼に魅入られた理由は、吸血が齎した愛情の幻とは別にあるようにも思える。

それよりも、腹におさめる生き血ある限り、そして特殊な処刑を施されない限り死とは無縁の吸血鬼が、糧である人間の命を優先して自らは朽ち果てていったという事実が、同胞としては非常に信じがたい。

吸血鬼に魅入られ、その生き血を啜られた人間は死後、吸血鬼として生まれ変わると、そして生まれ変わるという。

しかし、吸血鬼としての生命もなくした場合は文字通り、灰と化すのみである。輪廻からは除外され、生まれ変わりを許されることはない。

「ねえ、今あなたになら分かるでしよう。人間を愛してしまつた彼女の想いと、吸血鬼を愛してしまつた私の孤独が」

今度は、自分が恋の呪縛にその心を支配される番だった。

訝しげな表情を浮かべ、沈黙を守る吸血鬼の心の内を悟つたのか、彼女は歪みきつた表情に、不気味とも思える笑みを浮か

べ、「こちらの耳元で囁いた。

「早く殺して。私は彼女に抱いた全ての想いをあなたにあげるから。お願い、私の中をカラにして。私はもう彼女の顔を忘れてしまったのに、この愛しさだけはどうにも消し去ることが出来なかつたから」

このとき、吸血鬼には彼女の意図が掴めなかつたが、彼女に望まれるまま、蒼白の首筋に再び牙を沈めて残りの血液を吸い上げたその瞬間、すべてを悟ることとなる。

喉を潤す彼女の血液に染み込んだ、今は亡き女吸血鬼への積もり積もつた恋焦がれる想いの全てが受け継がれてしまつたと

翌朝、彼女はかつての美しい人間の姿を真紅の灰へと変え、
脆く朽ち果てその生涯を終えた。

思惑通り、吸血することによつて彼女が長年抱き続けていた
叶わぬ恋へのもどかしさを受け継いでしまつた吸血鬼はその灰を

かき集めると、どこかで自身と同じ吸血鬼として生まれ変わつた
であろう彼女を来る日も来る日も彷徨い探し続けたが、結局は
再会を果たせぬまま、十年、二十年と無情にも月日ばかりが過ぎ
ていき、ただ狂おしい恋慕ばかり募る日々が長く続いた。

やがて、あんなにも愛しく、そして見惚れるほど美しかつた

彼女の顔が思い出せなくなつた頃、時代は一変することとなる。
何の前触れもなく訪れた天変地異は人間たちを地獄へと誘い、
生き残つた者たちにさえ、もはや成す術はなかつた。

混血とした時代を迎えた地上は吸血鬼にとって、実に住み心地
の良い場所であつた。

かつて、自分が食い殺した人間たちが吸血鬼として生まれ変わ
り、かつての同胞であつたはずの人間を食らう。

そんな光景を目にする、ことも珍しくない世界で、なぜだろう、
彼女の姿だけが見当たらなかつた。

想いばかりが募り、やがては抱えきれないほどに膨れ上がりつて
思考の全ては彼女一色に染まる。

彼女がかつて経験した恋とは、こんなにも報われず、こんなにも
先が見えないものだつたのか。

未だ奇跡的に崩れ落ちることを免れている鉄筋ビルの上から
見渡した世界が、吸血鬼にとっての理想郷であることは今も変わ
りがなかつた。

人間の目を恐れる必要もなく、飢えに苦しむこともない。ただ
本能のまま、殺戮を繰り返しては己の腹を満たし、生きていたら
る夢のような現実である。

しかし、恋心とは実はじつにやつかいなもので、愛しい女がたつた
一人欠けただけで世界は白と黒の二色に色褪せ、まるで価値のない
もののように思えてしまうのだ。

身を焦がすほどの恋心までもその身に受け継いだ吸血鬼が

現世で生きていく理由など、彼女なしでは見出すことも出来なければ、歩む必要性すら感じられなかつた。

「俺に愛されたくて死んだのか、それともかつて自分を愛した吸血鬼を忘れるために死んだのか……」

小瓶に閉じ込めた人間としての彼女の亡骸である灰を夜空に散らし、風に乗つて煌きながらモノクロの世界へと同化していく様子を見下ろしながら、誰に問うわけでもなく尋ねてみたものの、もちろん、答えなど永遠に還ることはない。

「これで報われたのか、俺にすべてを押し付けて。俺はお前を愛したけれど、愛した瞬間にいなくなるなんてー。俺はどうすれば良かつたんだ」

煌めく空に向けた悲痛な叫びと真紅の灰が、胸に残された想いと同じく、行き場をなくして宙を舞つ。

そんな、もてあました愛情を手放す方法はただ一つ。

「ただ、俺はお前のよに誰かへ自分の想いを託したりはしない。その代わり、俺の全部をお前に還すよ」

彼女の遺した灰が紺の夜空に溶けて見えなくなつたと同時に、吸血鬼は銀のナイフを己の胸に突き立て、その身を色褪せた地上へふりりと投げたのであつた。